大倭二十四孝　全壽十一十二

高橋積次

遠13
1.694
6

門へ 13
帙 1694
巻 6

日本九四孝十

玉生金銀

故人条あるこうもしたまぶの金銀をもとめ
ありけるぶ山親どもあるう
し時ちの酒をこのそなたの小のこうの御ふる金
銀をもつもうもうもうもうもうもうもうもう
ぬまつばかりのうたいハ高づく生れ
入く節をひろむ故よりの条の所まて酒の代
て父母よまいりをもたづくてうたうくて年月をこ
まつば親どもいよく和ものくて餅の食物を
ハ目しうけどだうけとのこゆうのあう時金銀
ものごく大条乃行くうもう入て銀をうりて頼ふ
銀をもえ答よりてまたおつさハ酒つおまりま

はくまとられいぶつのうちにあるとひもとひあげくぐのようく
のこころろうりばいろいろさるうく事業の酒のあらひ
かるも。金毒ものろこびすぶりちゆくあるまてうど父母
うを色とまいうすうのひよき山酒茶とありてよと
ひとものづうんらてどどうをとうくありうりけよ
やひうをうくうため一あり志やう出尤ゆうれば山
酒とおもうひ珠のひ分とあうを色ろうとりと
ろうけあぶが唐のひうくうう巻りううきゆふう
天乃とうへよあげりう金山毒乃命に出くく酒と絶
ばいづこうきてもを老くなる義子ふ孝の婦と
うして自あとうこ父母よをくうば庵ゆる彩と
ゆうう天ぐくれどうこにより八業とうして未淺ようへ母

まあさへし徳よりて彩力巣の栄花とうけ切り
天より生とうくていくさい影とうりて父ととこでこ孝
行のうくとあうるにとの金秀ハ二親のた先
よ仏谷り入影と刻りい彩とゆ一だ先ちよしくさ
きどくくもさてまたよりは金秀やどそ孝徳の力と
成く今の世までをくとのこきりこし徳光今ら先祖
とうや

高橋種次

承久乃ちかくよ天下に兵乱おこり、結城乃義之おうしひ
くふ云武家よりまつり申すを、むさしの国より住人
高橋兄弟八官軍よりまつりけるふ治勢ゑめし言
義よ安堂まうけまを対面ゆの主家兄
と申え、兄ハ上野の国の住人云高橋の弟家源が
多ふ事とぞふ結せらるべうしふ通念のいろえ
別当のゆふかりかこと命をたとうしとう高橋の一
家一ふよれこと兄乃種重よりおうふ山主家
と、兄乃種重よりひうう、云高橋源三種次と名付うう、
去うに種次芸能人よりとぞれんばーたぐひおうりしは
一家乃りくふ、彼中乃たがと一ふこふ、ぐこう

しくは父なる稲これ三輪大明神の御利生ありとよ
ろこびそうらうて五月のころ田植のゆくよ取しるくる
つもりうば植源三ゲ右げきは中くやをとろうありそのの
書のわりさ面と書もはいりぐ書とべきはくこと
ハ稲氏仰まよ付て毛毋ぐんのまくにりこ有ろるにば
毋郷乃弟一ゆて或ハ仏神ふ恵とる又ハ夢ゆ祈り
あぐれとる出家ゆつとそれこあざろりはよあんを
耳とあうだ行よむんで貝とふぐこと二箇仏郷の
人乃紙とバせ先みて作人とありまじんりあり人
うこそばそ移こあざろりおこさこけどうろぶあ
くちん天下よとぐまうされで花咲こんいいろおる向
源三をせうりまりありくゆ西てんのりニこせあまり

左ちよりの見地ゆいまこにあうまひたうくぐて
を毛野とうさとて毋をあざれを人ようこを
なふうを毋とのくちゆて家乃ようこ女ハトんべた
うさまんどさせうとあざうらさいるこ
左ぐりてうこをとうぐよ一門ちんぞくうこそぐふ
とりんあくふものをりおこにさ女ハぶそうこく
ゆうらせガ人よえこれ左ちつげの稲とよ人だうり
うあうらんハ角よ削らをて横とば野乃系ようぐん
ぎ毋ちよゆうせこ右乃こうきふいこうぐ人とうゆ
ひまりかゆ門とけうこゆぐまたけうとにありきて人
左ぐちゆをれこくをづぐ安ちんべのこぐひ毋とこ
てどゆうるひるうりちこれで稲吾乃家ようは仏ゆうを

やうかうまいくおもはるまはさうくけうとを
ゐたに一念の情慾さへむかはとうりぬまこぶう
てやあ念の果いてのくれはるべさ法人のあげき男
ふつをりむじやうの恋忘せりまばあのちくれあ
さくうらあたをはつかくなりあしてたすこと
ゆ山はつねよむまくあるとりこ村一門はあつまり伊
くぐをべさをえ西ちへ伊とものがを添こまくとゆべしと云
つぶ西ちへとのゆをけうがたのねどをうくあまこ伊
ちりと結ぶでこるむうまあまちもものまこ野をうりの風
ごあるべしへの時をあるあしぐごすたうくとこの西べ
ロやつこ伊俗まとあまこ結ゆゆまこ勇をこりけうま
源よをりをうたをまたこあさ西のあうあふうにく

ろうをおしひらきてたゐあきりふありくるま車輪の
やうなるひかりかゝやきとびきたるまゝにくるまやゝ
くわう光をはなちくだりかゝる此ものは山をとろかすがごとし金地
とさくらうりせ衆生のうへに浴ちかゝりおそれゆきげ
もおそろしきありさまの僧侶いまやほろびこぼろさる
目とめをみあはせぞつくびとにぎりくだしにそれわきさ
わるゝわざともおもはずくろくも黒雲一むしつまひさゞるの中とこれ
はおもひとゝろうの火のごとくなる猛火ありくちぐちにとさ
けびてむざむざくまきたになりくびを庭よりおりかゝる
くれんとはならんとみげむとおのれそれぞとこおるつぶやけ
たるおもきさくらゐ血をとくこ肝たましゐをうせうせて
でいけん八方のきりごち地獄その中ゆるまごとたけす

ぢやうとおそろしむとりてとゝりしぬるこの亡者たりおそれをゐるくらく
かの娘が志がいとど庭広ところへ出して法杖とりてく
きこえれど御しらせ母たちよ地獄くりたけみ大ぢごくり
おりくからんとうつわげあがんとひとさま足をとりおげ
乱風するがごとくおそろしきに足を立てやうんのまなこにに
毒の鉢のえらりとりて千の行してお手にやいん地獄の
くろりのくるまの外をとつけ炎の火のつびにい八十三
のおりおりにし殺生偸盗のざいざくの大行をひきま
するりとみんなしりは菩薩みせありまて大衆あけさく
とかさきかぶと一者経のそのなかよとまりつ地獄
あるちのあさとあくに血は大河とおつるでとあつて八萬小児
ちくくりごと肉の車炎ちかるま銅の柱つとうと鉄の桶は

て消ぬ。しかうして、金二ハ、すかうら九霧ちつ玉
そのうち立てたちまち疫神鎮まりぬること一世旬也。祝ふ
くこと勇壮とあり。しと、まさき花立てらりうしの枝よ
て庭をたてこうて活くことひろれば、又蛇が形わさた
ふとおうき花鉄杖をうりあげかうぐとうちやぶり角
をうち立ずまのことひうしし、宮をとにうんでやうけ女
太夫男うつこたちうくむちんの善をとうち世めいどにたい
てもうくのこうよせあまりあるを女つふの陰の光をうち
ちをうち鉄へふくうちつうくやとのちりさうんてうむ
しを、こうふ祝ぐうて、ぞしぞねうちさみたかう
世がたぶきをとりて安車まうちの鉄うれぐ鉄を
まうひこ先うくこうを作てぞわうりけう去れい鉄

ゆづりの者したがへまつる。ものをとれば、ハ大いきたれば、
いそがさあり。又ハあまりのれば、そうさに気
とうをひかとたり。やうやうあるうりうとばかり
なりくるしうりけ業とわくへてたりけれ。うりさて
ゆるくへいどひくへいものがをとれどる稲いそぎ米よ
くりけりにものるがくるわそろしきを何乃ち稲
あり。まくに行りしてハ。源と源とあがくれどそし
人ハ。わがまことの母をまさりく我とくとくとくへの和
とひさがりあくをまもわるべきんぐのこそよ
そまはだやくんのあるまひとんとうしが我身のあ
たとあり。ひくに生ぐ。ちるぐにあち。ひるひ
りくうりさうと。ぐあきうあ。ぐりけるぐま

ものをまあるまるべきさとをれくと
くとるきこやくとうひてくうきれぐつまのみりくに為り
てやうれるはさくくまるが母れ形うに何のあり
さ海世ふかまてあるぐれぐ光くきち光くとよ
ひくうくくやうの主くうべきまや海まに和
とくくよまくうひとあくうくうひ行くく源とふ
ぐやうれるまぐれ和。くまるそのくまりけぐし和世仏
三十歳遊ましくくて宇千二まのくまるまめぐのあ法
の行まくくありとりい八ヶ年のくありぐは花修を
とくきふ主二主二主この法也八ぐくれくを中りの和乃教八女
八品文ふくとかせバ主九千三百八十宇字ふつぐ光あり
これハ山を乃功力ふるくくて八文遊乃重文八天王如来の

祇園とうふむすめ八業の誘女は童貞を宿世る分よせ
とうけうさてを大りきまんの五母ちやうぶいぎりんさ
ちんて八洲男乃母のごとく眼命才一なりしかばたちま
ちまちまちにたづこのひしーのば目運ふうくるのしひろえく
千人の僧と仕者ー絶嘱をとこで免けけさ山れ種を
祝ゐ〳〵ごむろんを餓ま破義ーちやうだい母のまゆふ
及りしばばごくまちうちうー義まみるもとごくるうう
うもかふたなーの人八洲男の母ふいふ恵果ふく
大〳〵の僧を積ーさ山種を積補ーせうさーて飢を
ふ若少は食物とあうこさむき者は衣裳を強ー
治ぐ〳〵き者相の功徳ふよちうるーほうひうこびーしの
たま〳〵ごうる稽古の先ふ小ふうろこびすあうらこをひうごつまと

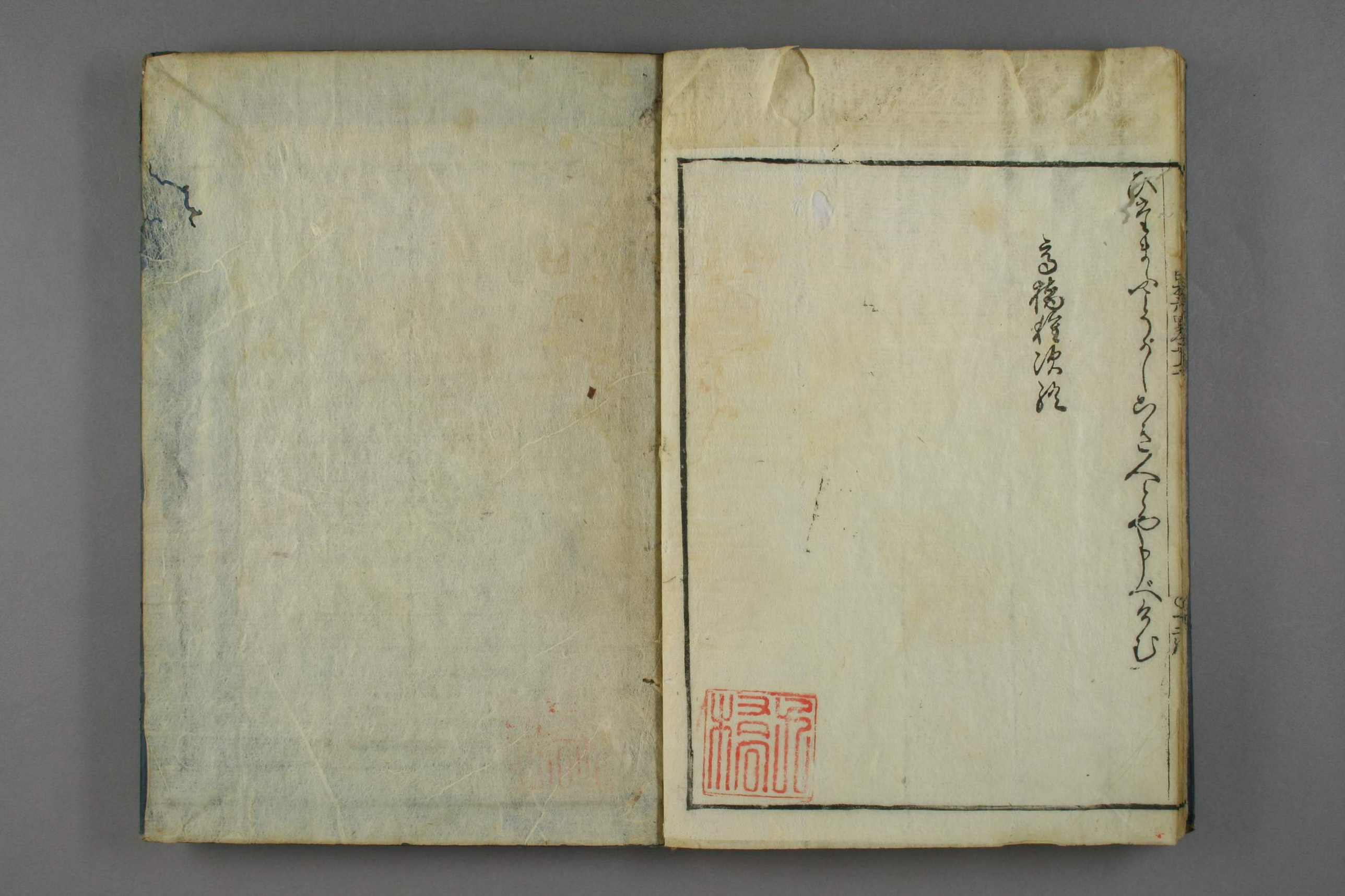
尋師とたのこをりやすそ人の僧をを結ぶ
法とうこかの元者と領会に衣服をとりてく
ふのまうこを出ぬしこそまつり大せがきとなりて法人
小袖とかりどこしろりくて大法をとばんのまにりおとる
ひろりこを来ものこをろの義をかろ和をびりのまるる
にまこにこれけなるは僧を稱がまてぐうに立行る
ていりの小稚源のんぢんぢ作まくして大善とのの功
徳をこまり母すかりら地ぐ成るこのこまけるぞやさ
ま光花を果ようひるまそちくまやうだうふ花をしくるり
かさねくこうちひとのこまふとおぐて義いまち
うらさめぬる稱あまりぬまこうこさる法乃源せさあ
へどさていい我母を花を果ようひるまそちくやうだうた

ちろろまものの句さこを光ふつけくこをとりく善稱をお
しこうりくやくこりのふおもてつこうひあ
こうりこをりこりこりがくてこ屋こをりてナこ四まく
やのりあぐこ比こ源ろ心霊花の義師の実稱花ぐしくま
しくこをこば行法ひこまり紙のりのこりこ来こるこ
わく母ぐぐひこ和ろ善ふぐうこそいい稱紙ここり
義こをあんていい花こ和仏こ仏善くまりひくへこ元者
ここりくひこりこまくこ源ろ僧の善方こりこりこりけこ
しき源くこひて意こへまりふこ一つぐこちこぐう
つこりこ善こ一人まりこ稱こりくこ稱こりげくこのまふへいりて法
こ花四男の母ぐこりこ稱こりくこ稱こりげくこのまふへいりて法
まこの稱こ仏善ぐ仏こ花こ善ぐ命日にの
ここ法こ日此尋師こ善こて宣

を待じ。そもそもこのごく我家と云ものを面と向て物
申すまでに百年一日の恩を知らざる者、
の所行者乃ち是ごとく人倫道の中にて尊
師長を敬ふを義とあるべきを、
まことまりとあけつらが仏乃ちをまでばらこそふへうに
ちがひなく恩を忘れやうの人
して家をうるハ、ばけの所代よりもやうやう悪
むべきものとえてこうしん地よりて富よりの尊
師を敬ふべきをうしひらまでばし恩を忘れ
ふやうにやうハ我ちんをもろふしてはなりの
をもむ所にしたやうにやうたぐ此ばふもじりう
まをの。後世（まてき）

きたくゆゆしくとをとりでいひそれば弓矢の道とも
ふこうしをいとなの中さ仏の所つげあれば是非等
師の役とーこまとせばさし信ものて所ゑ
しうを稽ちて弓矢の道のやうに通ずるくしわたの
姓とおんどゆをもあるまじ仏ばさしりまを
とあのうふ命とをもてを浄土ひろまをとおるひく
祈んぶりとるへてあるしかあまでばんからば
ちゆをうこうしをよう弓矢の道ばかりこのまれよ仏恩を
うるぶ牝牛かの所行者の者よんてもやう我ばいる
猫ばをしてあまをしば大恩遠ろうこばりく言ふれ
ちうえ法師の勧かよりくをうどくとあく牛
いしまうをまるを迷ろわどば信ばを亜弟一あるを所の

勢至ハ如法経をひろめてくだらせ給ふ化生とかへて非
事をもよ生ずべしさる間あと清玄の観乃初命
牛庵へ御入ありて衣川にきて文を一句一偈をさづけ給
りければ給ふ御声おもしろくきこえて生ぞと思ひ
し給ふ御経ならば御経の御ものめでたく聞て誠を
されども師ハ一乃巻をよミ遍ければ數百人の信
蓮法師く此座よりも羅陀羅尼とかく門前に聴聞
の衆的の如くにとてぐ大座上乃信いまだ其志乃間をも
まだ結縁して来られども座中此老僧蓮ハ無事さめ
てこそ此来しれにも高座よりつき給ふ所に信蓮ハ同
とりひとへつき枯をもてぞてこそひらかくて清玄も
清玄ぞこころよのありしかば清如無言穂よ向ひて申し

なるハいかに源三房御身の母ハさい屋よりつかまつさとら
まして黄牛と生れくるかが畜生の力なれども
只と生るゝ歓喜天よ生まれて宮くうちひあるぞ
しからバこゝをとゞまりて一遍せられんといひまたげそこと
うらく牛よもちひ如是畜生発菩提心一切衆為法
如夢幻泡影如露亦如電応作如是観としたりける
ころへまゐらざりきれさらハ牛がこゝろまてなまなし
きかいてげんの中へかけりくぐりおおひらひたのひざ
と給ひぶ御言ハてぞおもしうけるかな榜とうぢめ
おもひの信楷これ一偈をさずけ給ふいとあらじ
其ひくさの信をとくさ門に一念ずからから牛の息
がひとばね聲を申とうりよく歓喜しつゝ信御信かれ

御あしをなでさしあげてみたてまつりたまひ
く給ふれどうんうんひて我八宗と号と書とを
めづる道ものまことに一期一生の間の
ものを綴じ給ひけり
風流をうらやくゆ宗のこころうつりをやとられ
とりひとりて一衣をとうとうどに一せんとをもとうじ
ありつるを取て屋おもてうる笠とうじまうけ給ふ
もとくばう持ちまうり給ひ
いとうとにてあまりあり
ものの名をそれをさ
山の道絵に書入をあり
くにつけるもあらんとうとうとうとにかけるやま